この江戸時代（1603～1867年）の茅葺き屋根の門は、阿弥陀寺境内にある建造物の中で最古の建造物です。13世紀建立の元の仁王門は損壊しそのままになっていましたが、1685年、地元の大名である毛利就信が、1世紀以上前に損壊した門を再建しました。現在の門は、その前身である門と同じ設計とサイズで建てられています。門の名前は仁王（文字通り2人の王）から取られています。筋肉隆々の、恐怖感を抱かせる一対の守護神の仁王は門の両脇に立っています。（ここで、興味深いトリビアです。屋根の茅葺きの葺き替えは門の南側では25年おきに行われますが、日の当たりが少なく茅が湿ったままになる時間の長い北側では10〜15年おきに行われます。）

**金剛力士：2人の怖そうな守護神**

仁王（「2人の王」）とも金剛力士（「力強いレスラー」）とも呼ばれるこの2人が寺の門に立ち、入り口を護っているのを見かけることも多いものです。伝統的には右の像は口を開いて「あ（阿）」と発声し、左の像は口を閉じて「うん（吽）」と発声しています。これはキリスト教のΑΩ（アルファオメガ）のようなもので、調和と完全性を暗示しています。彫像は、寄木造と呼ばれる、複数の木を寄せ集め組み合わせる工法で造られており、木を合わせた部分が明らかで、そこには朱塗りの痕跡も残っています。職人技は卓越したもので、浮かび上がる静脈、盛り上がる胸郭、渦巻きのように体を包む裳、といった躍動感のあるディテールに、制作者である仏師、快慶らしさがよく表れています。高さ2.7メートル以上、重さ340キロもあるこの彫像は、鎌倉時代（1185～1333年）の初期に建立されたものです。堂々とした彫像ですが、快慶が奈良の東大寺のために作った同様の守護神が8メートルを超える高さであることを考えれば、阿弥陀寺の仁王像は控えめな方だといえます。